

# 邦人顛顚骨ノ研究(第一回報告) : 顛顚鱗ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/31122">http://hdl.handle.net/2297/31122</a>

# 邦人顛顚骨ノ研究(第一回報告)

## 顛顚鱗ニ就テ

(十二月十一日受附)

金澤醫科大學解剖學教室(岡本教授指導)

專攻生 岩田惣七

### 内容目次

緒論	研究材料並ニ研究方法	第四節	外聽道上高ニ就テ
第一章	顛顚各部ニ於ケル調査成績	第五節	前及後上乳嘴突起並ニブレイジクイ氏三隆起形成ニ就テ
第一節	顛顚骨顛頂突起ニ就テ	總括	
第二節	中顛顚動脈溝ニ就テ	引用文獻	
第三節	外聽道上棘ニ就テ	附圖説明	

(本篇ノ大要ハ第二十八回北陸醫學會總會ニ於テ報告セリ)

### 緒論

顛顚骨ハ胎生期極メテ複雑ナル組成ヲナシ、然カモ聽覺器官ヲ包藏スル關係上益々複雑ナル形態ヲナシ、人類學並ニ人種解剖學上興味深キモノアルヲ以テ古來幾多ノ學者ニ依リ或ハ發生學的ニ或ハ形態的ニ男女性的差異ニ就テ研究セラレタリ。就中其ノ主ナルモノハ Soemmering u. Blumenbach, Ackermann, Aeby, Davis J. Barnard, Schwabe, Albrecht,

Ecker, R. Virchow, 足立、M. Bartels, P. Bartels 等學ゲテ數フベカラズ。

翻ツテ臨床醫學の方面ヲ見ルニ顛顚骨ノ形態學ハ耳科學ハ勿論一般外科學上ニ在リテモ緊要ナル位置ヲ占メ、殊ニ軌近腦外科ノ著シキ發達ニ從ヒ之レガ耳科外科の解剖學ノ研究モ亦之レニ伴ヒ Zoya, Henle, Bezold, Kiesselbach, Hartmann, Zuckerkandel, Rüdinger, Körner, Trautmann, Schülzke, 岡田、菊地、岩田(一)、金杉、中野、森川等ノ業績相踵イデ發表セラレタリ。

然レドモ本邦人顛顚骨ニ於ケル人類學的研究ハ未ダ精細完全ナル域ニ達セリト云フヲ得ズ。殊ニ北陸地方頭蓋ニ於ケル顛顚骨ノ人類學的、人種解剖學的の並ニ耳科外科の解剖學ノ研究ニ至リテハ殆ンド之レヲ見ズ。之レ余ガ北陸地方頭蓋ヲ材料トシ顛顚骨ノ各部ニ就キ人種解剖學(Rassenanatomic)並ニ形態學的の男女性的差異(Geschlecht Unterschied)ノ目標ヲ求ムルヲ主眼トシ耳科外科の解剖ニ對シテモ論及セントスル所以ナリ。

## 第一章 研究材料並ニ研究方法

研究材料ハ凡テ金澤醫科大學解剖學教室所藏ノ年齡三歳ヨリ九二歳ニ至ル晒嘴北陸地方頭蓋四三〇個、(検査部位ニ依リ破損或ハ摩滅等ノ爲ニ多少ノ増減ヲ來セルモノアリ)即チ八六〇顛顚骨、中男性頭蓋二五七個(五一四顛顚骨)、女性頭蓋一七三個(二四六顛顚骨)ニシテ他ニ朝鮮人頭蓋(男性二個)、台灣人頭蓋(男性一個)、支那人頭蓋(女性一個)、台灣生蕃人頭蓋(性別不詳一個)及ビアドミラル島人頭蓋(女性一個、Admiralitäts Inselanerin)ニ就キテモ調査研究セリ。

研究方法ハ顛顚骨各部ノ觀察ニ對シテハ細心ナル注意ノ下ニ其ノ正確ヲ期シ、計測ニアリテハ Hermann 會社ノマルチン氏遊標尺(Gleitzirkel)ヲ使用シ先進諸家ノ計測方法並ニ諸注意事項ヲ採リテ以テ範トナシ且ツ加フルニ余自身ノ適當ニシテ而カモ必要ナリト認ムル方法ヲ併用シ觀察ニ於ケルト同様細心ノ注意ヲ以テセリ。而シテ又上記計測器ヲ使用シ得ザル部位ノ計測ニ當リテハ描寫法(Projektion)ニ依リテ測定ヲ行ヘリ。

## 第二章 顛顛鱗各部ニ於ケル調査成績

### 第一節 顛顛骨顛頂突起 (Processus parietalis squama temporalis)ニ就テ

顛顛鱗ノ上縁即チ顛頂縁ハ略半月形ヲ畫キテ顛頂骨外縁ヲ掩覆シ銳利端ニ終ル。時ニ該縁ノ略中央部ニ於テ稍後方ニ突出シ普通三角形ヲナセル特ニ長キ骨齒ヲ現ハシ深ク顛頂骨外縁ヲ掩覆スルモノアルヲ見ル。之レ即チ顛顛骨顛頂突起 (Proc. parietalis squama temporalis) ナリ。比較的屢々人類頭蓋ニ於テモ存在スルモノナレドモ、其ノ研究ニ至リテハ Schwabe, Gaetano-Cutore, Hyrtl, 足立、中野等ノ報告アルノミ。Hyrtlハ彼ノ著書 *Lehrbuch der Anatomie des Menschen*. II Bd. 1870. ニ簡單ナル記載ヲナセルニ過ギズシテ足立ニ依レバ彼ノ有名ナル *Le Loublet's* ニ於テスラ何等言及スル處ナシト云フ。

足立ハ本邦人頭蓋七〇個、歐洲人頭蓋一〇個ニ就キテ調査シ本邦人頭蓋ニアリテハ顛顛骨顛頂突起ト見做スベキモノ三七例(五二・九%)ニシテ、右側ノミニ存スルモノ一二例(一七・一四%)、左側ニノミニ存スルモノ一五例(二一・四三%)、兩側ニ存スルモノ一〇例(一四・二九%)ヲ見、歐洲人頭蓋ニアリテハ五例(五〇%)ニシテ右側一例(二〇%)、左側四例(四〇%)ニ於テ之レヲ實見セリト。即チ左右側間ノ關係ハ本邦人頭蓋ニアリテハ四二・二九%( $\Gamma > \Delta$ )、歐洲人ニアリテハ三〇%( $L > R$ )ニシテ一般ニ多ク存スルモノナルヲ知ル。其ノ他 Gaetano Cutore ハ成人頭蓋二八三個中一九例(六七%)、未成人頭蓋四三個中三例(六・九%)ニシテ小兒頭蓋ニアリテハ成人頭蓋ニ比シ稍多キヲ見、平井ハ樺太アイヌ人骨ノ研究ニ際シ五二個中三七例(一九・四%)、宮本ハ畿内地方邦人頭蓋ニ於テ二八%(男性一一例、女性三例)ナリキト云フ。中野ハ北陸地方頭蓋ニ於ケル異狀頭蓋ノ一例ト題シ該突起ニ恰當スベキ一例ヲ報告シ本例ニアリテハ顛頂縁中央部ニアラズシテ反ツテ前三分ノ一ノ部ニ存セリト云ヘリ。

顛顛骨顛頂突起ニ近ク血管溝ノ存スルモノアルヲ見ル、而シテ該突起ノ後方ニ位シ存在スル處ノモノハ佛蘭西學派

ノ説ノ如ク内頸動脈ヨリ分枝スル後深顱顱動脈ニアラズシテ英獨學派ノ説ノ如ク上淺顱顱動脈ヨリ分枝セル中顱顱動脈ノ走行ニ依リテ生ズル血管溝ニシテ、該突起ノ附近稀ニハ尖端部ニ一致シ頭蓋内面ヨリ顱頂骨ヲ穿通シ(vergl. Henle u. Krause)、或ハ縫合部ヨリ出テ顱頂骨側面ヲ上行スル處ノモノハ中硬腦膜動脈ノ一分枝(Sulcus pro arteria meningea media)ヲ通ズルモノナリ。足立ニ依レバ該突起ニ接シ血管溝ノ存スルモノハ甚ダ稀ニシテ前者ニ屬スルモノ歐人頭蓋一〇例中八例ニ於テ之レガ消失セルモノアルヲ見、後者ニ屬スベキモノニアリテハ邦人頭蓋七〇例中三例(四・二九%)ニシテ右側一例、左側二例ニ於テ見タルニ過ギズシテ歐人頭蓋ニ於テハ一例モ存セザリシト云フ。

(第一表) 顱顱骨顱頂突起ノ形成

性別 側別	合	♀	計
右側	17 (7.98%)	7 (4.83%)	24 (6.7%)
左側	21 (9.36%)	9 (6.21%)	30 (8.38%)
兩側	4 (1.88%)	5 (3.45%)	9 (2.51%)
計	42 (19.72%)	21 (14.48%)	63 (17.59%)

余ハ北陸頭蓋三五八個(七一六顱顱骨)中男性二一三個(四二・六顱顱骨)、女性一四五個(二九・〇顱顱骨)ヲ調査シ顱顱骨顱頂突起ヲ有スルモノ六三例(一七・五九%)ニシテ男性頭蓋ニ於テハ四二例(一九・七二%)、女性頭蓋ニ於テハ二二例(一四・四八%)ナルヲ見タリ。

之レガ兩側並ニ男女兩性間ニ於ケル關係ハ第一表ニ示スガ如ク右側ニノミ存スルモノ二四例(六・七%)、左側ニノミ存スルモノ三〇例(八・三八%)、兩側ニ存スルモノ九例(二・五二%)ナリ。而シテ右側ニノミ存スルモノ二四例中男性一七例(七・九八%)、女性七例(四・八三%)、左側ニノミ存スルモノ三〇例中男性二二例(九・八六%)、女性九例(六・二二%)、兩側ニ存スルモノ九例中男性四例(二・八八%)、女性五例(三・四五%)ナリ。

即チ北陸頭蓋ニ於ケル顱顱骨顱頂突起ノ頻度ハ第二表ニ於ケルガ如ク、先進諸家ノ歐洲人、樺太アイヌ人、畿内日本人ニ比シ尠シト雖モ右左側關係ハ足立ノ成績ト同様左側ニ多ク、男女兩性間ノ關係ニ於テハ偏側存在ノモノハ男性ニ多キモ兩側存スルモノニアリテハ反ツテ女性ニ多キ結果ヲ見タリ。

(第二表) 各人種ニ於ケル調査成績ト著者ニ依ル成績比較

別 報告者	右側	左側	兩側	計	調査數
Gaetano-Cutore	—	—	—	19 (6.7%)	283 個(歐人)
足立	1 (10%)	4 (40%)	—	5 (50%)	10 〃( 〃 )
足立	12 (17.14%)	15 (21.43%)	10 (14.29%)	27 (52.86%)	70 〃(邦人)
宮本	—	—	—	14 (28%)	50 〃(邦人)
平井	—	—	—	37 (19.40%)	52 〃(樺太アイヌ人)
岩田	24 (6.7%)	30 (8.38%)	9 (2.51%)	63 (17.59%)	358 〃(邦人)

顱顱骨顱頂突起ト Sulcus pro arteria meningea media トノ關係ニ

就テハ、余ハ三五八例中六例(一・六八%)ニシテ右側二例、左側四例ナルヲ見タリ。即チ足立ノ畿内日本人ニ於ケル成績ト左右側間關係ニ於テハ相一致スルモ其ノ率ニ於テハ甚ダ尠ナク、男女兩性間ノ關係ニアリテハ余ノ例ニアリテハ女性ハ唯一例ヲ見ルノミニシテ他ハ全部男性ナリキ。(第一圖參照)

突起ノ該血管溝ト關係ヲ有セザルモノハ一〇例(二・七九%)、ニシテ夫等ノ中、血管溝存スルモ該突起ノ之レニ關セザルモノ即チ血管溝ノ該突起ヨリ遠隔部ニ存スルモノハ二例(右側一、左側一)、血管溝存スルモ該突起ノ存セザルモノハ八例(右側五、左側三)ナリ。之レガ男女兩性別ハ右側(男性一、女性四)、左側(男性一、女性二)ニシテ一般ニ女性ニ多シ。

次ニ顱顱骨顱頂突起ト中顱顱動脈溝(Sulcus arteria temporalis media)トノ關係ニ就テ觀察シ次ノ三型ニ分類セリ。

第一型 顱顱骨顱頂突起ニ接シ中顱顱動脈溝ノ存スルモノ。(第二圖參照)

第二型 顱顱骨顱頂突起ニ關セズ該血管溝ノ存スルモノ。(第三圖參照)

第三型 顱顱骨顱頂突起存スルモ該血管溝ノ缺如スルモノ。(第

四圖參照)

以上ノ如キ三型ニ分類シテ得タル余ノ成績(六四例)ニ就キテ見ルニ第二型ニ屬スルモノ最モ多ク三六例(五六・二五%)、第一型ニ屬スルモノ之レニ亞ギニ一例(三二・八一%)ニシテ第三型ニ屬スルモノ最モ少ク七例(一〇・九四%)ナリ。而シテ之レガ男女兩性間ノ關係ハ第一型ハ男性二例(二六・〇九%)、女性九例(三四・六二%)、第二型ハ男性二七例(五八・七〇%)、女性九例(三四・六二%)、第三型ハ男性五例(一〇・八七%)、女性二例(七・六九%)ニシテ、第一型ハ女性ニ多キモ第二及第三兩型ハ男性ニ多シ。(第二表參照)

(第三表) 予ノ分類セル各型ノ男女的關係

性別		I - 型	II - 型	III - 型
合	(R.+L.)	12 (26.09%)	27 (58.70%)	5 (10.87%)
男	(R.+L.)	9 (34.62%)	9 (34.62%)	2 (7.69%)
女		21 (32.81%)	36 (56.25%)	7 (10.94%)

(第四表) 予ノ分類セル各型ノ左右的關係

側別	性別	I - 型	II - 型	III - 型	計
右側	合	4 (6.25%)	15 (23.44%)	3 (4.69%)	
	男	4 (6.25%)	2 (3.13%)	1 (1.56%)	
	小計	8 (12.5%)	17 (26.56%)	4 (6.25%)	29 (45.31%)
左側	合	8 (12.50%)	12 (18.75%)	2 (3.13%)	
	男	5 (7.81%)	7 (10.94%)	1 (1.56%)	
	小計	13 (20.31%)	19 (29.69%)	3 (4.69%)	35 (54.69%)
總計					63

左右側間ニ於ケル關係ハ第四表ニ示セルガ如ク第一、第二兩型ハ左側ニ多クシテ第三型ハ右側ニ稍多シ。

即チ顱顱骨顱頂突起ト中顱顱動脈溝トノ間ニ關係ヲ有スルモノハ女性ハ男性ニ比シ多數ヲ占メ(八・五三%)、Sulcus pro arteria meningeae media トノ關係ト全ク

反對ナル結果ヲ得タリ。

之レヲ要スルニ北陸地方頭蓋ニ於ケル顱顳骨顱頂突起ノ頻度ハ歐洲人、樺太アイヌ人、畿内日本人頭蓋ニ於ケル検査成績ニ比シ稍尠シト雖モ、之レガ左右側間關係ハ全ク相一致シ左側ニ多キヲ示シ、男女兩性間ノ關係ハ先進諸學者ノ記載ニアリテハ詳カナラザルモ男性ニ多ク女性ニ倍スルヲ見ル。

而シテ又顱顳骨顱頂突起ト *Sulcus pro arteria meningea media* トノ關係ハ血管溝ノ該突起ニ接シテ存在スルモノ僅カニ一六八%ニ於テ存在スルノミニシテ、足立ノ日本人頭蓋ニ於ケル成績ノ半數ニ達セズ。全ク該突起ヲ缺如スルニ拘ハラズ血管溝ノ存スルモノ八例ヲ數フル處ヨリ見レバ該突起ト *Sulcus pro arteria meningea media* トノ間ニハ比較的ニ密接ナル關係ノ存スルコトナキガ如シ、然リト雖モ該突起ノ血管溝ニ接シテ存在スルモノ、殆ンド凡テハ骨齒一般ニ細長ニシテ深ク顱頂骨間ニ挿入セルモノアルハ事實ニシテ余ハ長サ一八・〇 m.m.ニ達スルモノアルヲ見タリ。

中顱顳動脈溝トノ關係ニ就テハ該突起ト該血管溝トノ間ニ何等ノ關係ヲ有セザルモノ多數ヲ占メ、關係ヲ有スルモノ三二・八一%ニ過ギズト雖モ、血管溝ハ大多數、突起ノ附邊ヲ走り分枝ヲ出シ、突起ヲ掩フガ如キ形態ヲナスカ或ハ之レヲ押シ舉グルガ如キ狀ヲナスヲ觀レバ尠クトモ該突起ト血管溝トノ間ニ發生上一定ノ關係ノ存スルコトアルヲ思ハシム。足立ハ顱顳骨顱頂突起ハ鉛直顱頂縫合(*Sutura parietalis verticalis.*)トノ間ニ密接ナル關係ヲ有スルモノナリト說フルモ余ノ北陸地方頭蓋ニ於ケル觀察ノ結果ニ徴スルニ血管發生ト化骨トノ間ニ於テモ亦一定ノ關係ノ存スベキヲ信ズ。

## 第二節 中顱顳動脈溝(*Sulcus arteria temporalis media.*)ニ就テ

中顱顳動脈ハ外頸動脈ノ終末枝、上淺顱顳動脈ノ一分枝ニシテ外聽孔ノ略直上ニ於テ顱頂骨ニ向フテ走ル、而シテ其ノ走行ニ從ヒ顱顳骨鱗狀部ニ稍著明ナル血管溝ヲ表ハス。之レ即チ中顱顳動脈溝ナリ。

該動脈溝ハ管ニ現代人ノミナラズ既ニ石器時代並ニ金石併用時代人人骨ニ於テモ見ラル、コトハ清野、金關、平井等ノ吉胡人骨、福岡縣筑紫郡ニテ壘棺中ヨリ發見セラレタル金石併用時代人人骨、静岡縣濱名郡舘塚貝塚ヨリ發掘セ

ラレタル頭蓋等ノ研究ニ於テ記載セラル。其ノ調査成績ヲ見ルニ一般ニ男性頭蓋ニ於テハ著明ニ表ハレタルモノ多ク、女性頭蓋ニアリテハ發育弱ク鮮明ヲ缺クモノ多シト云フ。

平井ハ樺太アイヌ人人骨ノ人類學的研究ニ際シ五二個中該動脈溝ノ走行鮮明ナルモノ五七・一%ナルヲ見タリト稱スルモ之レガ詳細ナル觀察ニ對シテハ何等記載スル處ナシ。

余ハ北陸頭蓋四二五個(男性二五七個、女性一七〇個)ニ就テ觀察セントシ血管溝ノ走行ニ從ヒ便宜上形態ヲシテ左ノ六類ニ分類セリ。即チ

(第五表) 中顛顛動脈溝各型ノ左右的關係

側別	型別	右		左		計	
		(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
右側	A	180	71.43%	105	61.76%	285	67.54%
	B	5	1.98%	8	4.71%	13	3.08%
	C	16	6.35%	11	6.47%	27	6.50%
	D	4	1.59%	2	1.18%	6	1.42%
	E	36	14.29%	27	15.88%	63	14.93%
	F	11	4.37%	17	10.00%	24	6.64%
		252		170		422	
左側	A	120	46.99%	71	42.26%	191	44.94%
	B	12	4.66%	9	5.36%	21	4.94%
	C	32	12.45%	21	12.50%	53	12.47%
	D	6	2.33%	3	1.79%	9	2.12%
	E	70	27.24%	46	27.38%	116	27.29%
	F	17	6.62%	18	10.71%	35	8.24%
		257		168		425	

A類 外聽孔上緣部ニ於

ケル垂直線ニ對シ後方

ニ斜ニ直走スルモノ

B類 前同線ニ對シ前方

ニ斜ニ直走スルモノ

C類 前同線ニ對シ後方

ニ弓狀ヲナシ走ルモノ

D類 前同線ニ對シ前方

ニ弓狀ヲナシ走ルモノ

E類 前同線ニ對シ略一

致シテ走ルモノ

F類 血管溝ヲ全然缺如

スルモノトス。

中顱顱動脈溝ハ男女兩性共ニ鮮明ナルモノ多ク六七九二%ヲ占メ、鮮明ヲ缺クモノ二四六四%ニシテ、F類ニ屬スルモノハ七四四%ニ過ギズ。

之レガ左右兩側間ニ於ケル關係ハ第五表ニ示スガ如ク兩側共ニA類ニ屬スルモノ最モ多ク五六二%、E類ニ屬スルモノ次位ニアリ二一三%、D類ニ屬スルモノ一七七%ニシテ最モ尠シ。而シテ右側ニアリテハA類ハ絶對的ニ多數ヲ占メ、B、C、D、E、F各類ハ左側ノ其レニ比シ甚ダ少ク殊ニE類ニ至リテハ左側ノ半數ニ在リ。左側ニアリテハ、C、D、E各類ハ略右側ニ倍シ、B、F類モ右側ニ比シ稍多キヲ見ル。即チ外聽孔上緣部垂直線ニ對シ其ノ後方ニ存スルモノ(A+C)類ハ六五六四%、前方ニ存スルモノ(B+D)類ハ五七九%ニシテ左側ハ右側ニ比シ(B+D)類多キヲ見ル。之レ外科學上注意スベキコトナリトス。之レガ右左並ニ男女間ノ關係ハ第六表ニセルガ如ク(A+C)類ハ男女、兩側共ニ多キモ一般ニ右側ニシテ男性ニ多ク、(B+D)類ハ左側ニ多キモ兩側共ニ女性ニ多キヲ見ル。

(第六表) (A型+C型)、(B型+D型)ノ左右、男女的關係

側別	性別	(A+C)		(B+D)	
		(n)	(%)	(n)	(%)
R	♂	196	77.78	9	3.57
	♀	116	68.23	10	5.89
L	♂	152	59.14	18	6.99
	♀	92	57.76	12	7.15
R+L	計	556	65.64	49	5.79

- 男女兩性間ノ關係ニ就テハ同様第五表ノ如ク男女兩側共ニA類ニ屬スルモノ最多數ヲ占ムルモ、他ノ各類ニ於ケル比率ハ女性ニ多ク特ニB類、F類ハ共ニ多キヲ見ル。兩側男女兩性間ノ關係ニ就テ詳述セバ
- 1、A類ハ右側ニ多ク男性ニ多シ。
  - 2、B類ハ左側ニ多ク一般ニ女性ニ稍多キガ如シ。
  - 3、C類ハ左側ニ多キモ男女兩性間ニ殆ンド差異ヲ認メズ。
  - 4、D類ハ左側ニ多ク兩側共ニ男性ニ稍多キヲ見ル。
  - 5、E類ハ左側ニ多ク而シテ女性ニ多シ。
  - 6、F類ハ左側ニ多ク女性ニ多シ。

中顱顱動脈溝ヲ缺如スルモノ、中兩側共ニ缺如スルモノハ六例(一。

四二%)ニシテ、内男性一例(〇二%)、女性五例(一四〇%)ナリ。即チ男性ハ兩側缺如總數ノ一六六七%ニシテ女性ニアリテハ八三三三%ノ多數ナルヲ見ル。

中顛顛動脈溝ノ分岐狀態ハ多種多樣ニシテ總數ノ三二・二三%ニ於テ存在スルモノ一側ニ二枝以上兩側共ニ四枝以上存スルモノハ認ムルコト能ハザリキ。

余ハ便宜上分岐狀態ヲ左ノ六型ニ分類セリ。即チ

I型前方ニ向ヒ一枝ヲ出スモノ

II型前方ニ向ヒ二枝ヲ出スモノ

III型後方ニ向ヒ一枝ヲ出スモノ

IV型後方ニ向ヒ二枝ヲ出スモノ

I'型前方ニ一枝、後方ニ一枝ヲ出スモノ

II'型前方ニ一枝、後方ニ二枝ヲ出スモノ

III'型前方ニ二枝、後方ニ一枝ヲ出スモノ

IV'型前方ニ二枝、後方ニ二枝ヲ出スモノ

トス。

即チI、II、III、IV、各型ハ單純型ニシテI'、II'、III'、IV'各型ハ前記各型ノ混合型ナルモ、余ノ検査セル頭蓋ニ於テハ完全ニ各型ニ分類スルヲ得タリ。

余ノ調査セル北陸地方頭蓋ニ於ケル成績ハ第七表ノ如ク第I型ハ男女兩側共ニ最も多く、検査頭蓋總數ノ二五・二六%ニシテ第II型ハ次位ニシテ三九・六%ヲ占ム。之レガ兩側並ニ兩性間ニ於ケル關係ハ第I型ハ前述ノ如ク最多數ヲ占ムルモ男性ニシテ而カモ右側ニ多く、第II型ハ一般ニ左側ニ多くシテ右側ニ於テハ男性ニ、左側ニ於テハ反ツテ女性ニ稍多キヲ見ル。第III型ハ一般ニ右側ニ多キモ右側ハ女性ニ多く、左側ハ男性ニ多くシテ第II型ト正反對ナル結果ヲ

示セリ。第IV型ハ右側ニ多ク右側ハ男性ニ、左側ハ女性ニ多クシテ男女兩性間ノ關係ハ全ク第II型ニ類セルヲ見ル。

(第七表) 中顱顱動脈溝分枝狀態各型  
左右、男女的關係

側別	型別	合		♀	
		(n)	(%)	(n)	(%)
R	I	81	32.14	46	27.06
	II	6	2.38	2	1.18
	III	9	3.57	10	5.88
	IV	3	1.19	1	0.59
	I'	5	1.98	1	0.59
	II'	3	1.19	—	—
	III'	2	0.79	—	—
	IV'	1	0.40	—	—
L	I	62	24.12	18	16.67
	II	7	2.72	5	2.98
	III	13	5.06	2	1.19
	IV	—	—	1	0.6
	I'	4	1.56	2	1.19
	II'	—	—	—	—
	III'	—	—	—	—
	IV'	—	—	—	—

以上ノ結果ヲ約言セバ中顱顱動脈ノ分枝狀態ハ一般ニ男性ニ於テ著明ニ表ハレタルヲ知ル。

同一血管溝ニ於テ前後ニ向ヒ分枝スルモノ即チ混合型モ亦男性ニ於テハ著明ナルモ、女性ニ於テハ唯第I型一二例中三例ヲ見ルノミニシテ、他ノ各型ニ屬スルモノニ至リテハ全ク見出スコトヲ得ザリキ。

分枝狀態ノ兩側共ニ混合型ナルモノ、一側混合型ニシテ他側缺如セルモノ、他側單純型ニシテ一側混合型ナルモノ、兩側共ニ單純型ナルモノハ男性四七例(一八・六五%)、女性二二例(二・三二%)ニシテ一般ニ男性ニ多キモ、兩側共ニ第I型ナルモノ最モ多ク男性二四例(五・〇六%)、女性一二例(五四・五四%)ニシテ、一側II型、他側I型ナルモノ男性六例(二・二七七%)、女性三例(一・三六四%)、一側I型、他側III型ナルモノ男性五例(一・〇六四%)、女性四例(一・八二八%)、一側I型、他側缺如セルモノ男性二例(二・二三%)、女性三例(一・三六四%)、一側II型、他側缺如セルモノ男性一例(二・二三%)、一側I型、他側I型ナルモノ男性八例(一七・〇二%)、一側I型、他側II型ナルモノハ男性一例(二・

一三%)、一側IV型、他側I型ナルモノ男性一例(二・二三%)、一側III型、他側I型ナルモノ男性二例(四・二六%)ナリ。之レヲ要スルニ中顛顛動脈溝ノ分岐状態ハ、男女兩性間ニ於ケル差異比較的明カニ表ハレ特ニII'、III'、IV'、各型ニ屬スルモノヲ見バ略男性ナリトノ斷定ヲ下スモ誤リナカルベシ。而シテ又該血管溝ノ兩側共ニ缺如スルモノハ女性ナリト稱スルモ又誤リナキガ如シ。

血管溝ノ走行ニ就テハ、先進諸家ノ說ノ如ク余ノ檢査成績ニアリテモ亦外聽孔上緣部ニ於ケル垂直線ニ對シ後方ニ斜走スルモノ最モ多ク、前方ニ存スルモノハ僅カニ五・七〇%ニ過ギザレドモ該部分ノ皮膚切開ヲ施ス必要アル場合留意スベキハ勿論ニシテ外聽道上緣ニ於ケル垂直線ノ前方、Kronleinノ第I線ノ上方、外聽道上緣ト第II'、第IV線トノ交點ヲ結ブ線ト、第IV線ニ依ツテ生ズル三角形ニナストキハ中顛顛動脈損傷ノ危險ヨリ免ル、ヲ得ン。而シテ特ニ左側ハ右側ニ比シ前方ニ存スルモノ多キハ又緊要ナルコトナルベシ。

### 第三節 外聽道上棘(Spina suprameatum)ニ就テ

外聽道上棘ハ顴骨突起(Proc. zygomaticus)ノ根部、即チ乳櫛上櫛(Crista supramastoidica)ノ下方、外聽道後壁ニ於テ顛顛鱗ヨリナル壁ノ上方ニ往々尖銳ナル骨隆起トシテ現ハレ、其ノ大サ並ニ存立ハ不定ナルモノナリ。

外聽道上棘(Spina suprameatum)ナル名稱ハ一八七二年耳科學ノ泰斗 Bezold 及ヒ Henle 等ニヨリ命名セラレタルモノナルモ、其ノ發生ニ就テハ甲論乙駁未ダ確定スルニ至ラズ。Luschkaハ胎生期、外聽道後上前三壁ヲ圍ム一獨立骨即チ鼓上骨(Os supratripanicum)ヲ生ジ、其ノ外上端ニ於ケル不完全癒着ニ依リテ生ズルモノナリトシベルー人木乃伊頭蓋ニ於テ明カニ該獨立骨ノ存在セルヲ實見セリト云フ。本邦ニアリテハ長谷部博士ハ大正八年陸前國氣仙郡未崎村字細浦上ノ山貝塚ヨリ發掘セル石器時代人頭蓋ニ於テ Luschkaノ所謂鼓上骨ヲ有スルモノアルヲ發見シ外聽道上棘發生ニ就テ一新紀元ヲ劃スルコトアルベキヲ說ケリ。然レドモ清野、金關、平井等ハ多數ノ石器時代、金石併用時代、古墳時代人頭蓋ニ就キ詳細ナル研究ヲ企テタルモ長谷部ガ發見セルガ如キ所謂鼓上骨ノ存スルモノアルヲ見ザリキト云フ。

外聽道上棘ハ人類學上頭蓋計測ニ際シ、計測基點ノ一トシテ重要ナルモノニシテ、又臨床上極メテ重要ナル部位ニ存スルハ今更ラ喋々スルヲ要セザレドモ耳科學上乳嘴突起部手術ニ際シ所謂手術三角部 (Operations Dreieck.) ノ一點ヲナシ、或ハ鼓室入口部並ニ危險性顛顚骨ノ豫知ニ向ツテ意義アルモノナルガ故ニ之レガ研究ニ從事セルモノ泰西ヲ通ジ枚擧ニ違アラズ。外聽道上棘ノ缺如セル場合ハ歐洲人頭蓋ニアリテハ Kisselbach 一〇二%、Schitze 八九%、Rauber-Kopfsch 一一〇%ナリト云フ。Kisselbach ニ依レバ外聽道上棘ノ缺如セルモノハ既ニ初生兒ニ於テ缺如シ、身體發育ニ伴ヒ該棘ノ發育ヲ來スコト絶對ニナキモノナリト云フ。氏ノ詳細ナル研究ニ依レバ第一四表ニ於ケルガ如ク既ニ一歳ニ於テ兩側缺如スルモノ一一・五五%ニシテ年齢ヲ重ヌルニ從ツテ遞減スルガ如キ現象ヲ認ムルコトナシ。而シテ小兒ニ於テハ右側ニ缺如スルモノ二・九%、左側ニ缺如スルモノモ同様二・九%、兩側缺如スルモノ一二%ナルモ、成人頭蓋(一〇〇個)ノ檢索ニアリテハ右側ニ缺如スルモノ六%、左側ニ缺如スルモノ三%、兩側共ニ缺如スルモノ四%ナリキト云フ。

支那人頭蓋ニアリテハ中野ノ北京及ビ庫倫人(蒙古人)ニ就テ觀察セル所ニ依レバ其ノ率ニ於テハ明カナラザルモ該棘ノ缺如スルモノ甚ダ少ク森川ノ支那人頭蓋一一四個ノ調査ニ依レバ發育著明ナルモノ三八・二六%、發育中等度ノモノ四六・四九%、痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノ一五・二五%ニシテ、缺如セルモノハ一例モ見ザリキト云フ。樺太アイヌ人ニアリテハ平井ハ樺太アイヌ人人骨五二個(男性二三個、女性二〇個、小兒九個)ニ就テノ人類學的研究ニ際シ該棘ノ缺如セルモノ二八・六%ノ多キニ達セルヲ記載セリ。

本邦人ニ在リテハ鈴木ハ畿内地方頭蓋一〇〇個(男女各五〇個)ニ於テ兩側共ニ外聽道上棘ヲ缺如セルモノ四例(共ニ女性)、右側ニノミ缺如セルモノ三例即チ總計七例(七%)ニ於テ缺如セルモノアルヲ見、小兒ニアリテハ一般ニ稀少ナルヲ説ケリ。

岩田(一)ハ晒嘴東京地方頭蓋一〇七個(成人頭蓋一〇三個、小兒頭蓋四個)ニ就キ該棘ノ發育状態ヲ調査セルニ、全然

缺如スルモノハ僅カニ二例(一・九%)ニシテ發育佳良ナルモノ一八例(一七・五%)、發育中等度ナルモノ二六例(二五・二%)、發育微弱ナルモノ四三例(四一・七%)、單ニ痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノ一四例(一三・六%)ニシテ發育微弱ナルモノ最モ多ク其ノ痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノヲ合スレバ五五・三%ノ多キニ達シ發育著明ナルモノハ少數ニシテ、之レニ發育中等度ナルモノヲ合スルモ總數ノ五分ノ二ニ過ギザル成績ヲ得タリ。宮本ハ鈴木ト同様畿内地方頭蓋ニ於テ該棘ノ缺如セルモノ一二%ナリシト云フ。

清野、金關、平井等ノ石器時代、金石併用時代、古墳時代人人骨ニ就テノ研究ニ依レバ吉胡貝塚ヨリ發見セル吉胡人骨(石器時代變形頭蓋)ニ於テ男性ト推定セラル、頭蓋(清野第四一八號)ニ於テハ左側(右側顛顛骨缺)ニアリテハ該棘並ニ道上窩ハ中等度ニ發育シ、女性ト推定セル頭蓋(清野第三五三號、清野第三六一號)ニアリテハ前者ハ熟年ノ女性ニシテ外聽道上棘並ニ道上窩共ニ尋常、後者ハ老年ノ女性ニシテ發育弱キモ其ノ痕跡ハ明カニ認ムルヲ得タリト云フ。又福岡縣筑紫郡山家村ノ甕棺ヨリ發見セラレタル金石併用時代人老年、男性ト推定セル頭蓋ニアリテハ發育弱ク、平井ノ静岡縣濱名郡入野村字蛭塚貝塚ヨリ發掘セル頭蓋ニ於テ第I號(野清第二五九號、男性、熟年ト推定)ハ右側(左側缺)ニ於テ發育著明、第II號(清野第二六〇號、熟年ノ女性ト推定)ハ兩側共ニ發育弱ク、第III號(清野第一四二號、熟年ノ女性ト推定)ハ外聽道上棘ノ發育弱キモ道上窩ノ發育強度ニシテ深ク凹陷スルヲ認メタリト云フ。之レヲ要スルニ外聽道上棘ハ既ニ石時器代、金石併用時代、古墳時代人人骨ニ於テモ存在スルコト明カニシテ、然モ男性ニ於テハ發育一般ニ強度ニシテ女性ニ於テハ弱度ナルヲ見ル。余モ亦外聽道上棘觀察ニ當リ、先進諸家ノ如ク發育著明ナルモノ、中等度ナルモノ、弱度ナルモノ及ビ痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノ、全然缺如スルモノノ四類ニ類別セントセシモ、外聽道上棘ノ存スル部反ツテ凹陷セルモノ及ビ上記各類ニ算入シ得ザル一種特別ナル型狀ヲ呈スルモノアルニ遭遇セリ。此ノモノハ通常外聽道上棘ノ存スベキ部位ニ存スルモ尖端極メテ尖銳菲薄ニシテ其ノ狀恰モ特別ナル一個ノ骨片ヲ外聽道上後壁ニ附着セシメタルガ如クニシテIusclanノ所謂鼓上骨ノ存在ヲ認容シ得ベキガ如キ形態ヲナセリ。余ハ之

レヲ異狀型トシテ記載セリ。

北陸頭蓋ニ於テ外聽道上棘ノ缺如セルモノハ二九例(六・九〇%)ニシテ、右側ニノミ缺如スルモノ一〇例(二・三八%)、左側ニノミ缺如スルモノ一二例(二・八六%)、兩側共ニ缺如スルモノ七例(一・六七%)ナリ。之レガ兩側並ニ男女性間ノ關係ハ第八表ノ如ク右側ニノミ缺如スルモノ一〇例中男性一例(〇・二四%)、女性九例(二・二四%)、左側ニノミ缺如スルモノ一二例中男性五例(一・一九%)、女性七例(一・六七%)、兩側共ニ缺如スルモノ七例中男性一例(〇・二四%)、女性六例(一・四三%)ニシテ、一側ノミニ缺如スルモノハ男性六例(一・四三%)、女性一六例(三・八一%)ナリ。之レヲ要スルニ外聽道上棘ノ缺如スルモノハ左側ニ多ク而シテ女性ニ遙カニ多シ。

(第八表) 外聽道上棘ヲ缺如セルモノノ左右並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		♂ + ♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	1	0.24	9	2.14	10	2.38
L	5	1.19	7	1.67	12	2.86
R+L	1	0.24	6	1.43	7	1.67
計	7	1.67	22	5.24	29	6.90

(第九表) 外聽道上棘ノ發育強度ナルモノノ左右並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		♂ + ♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	23	9.24	11	6.43	34	8.10
L	14	5.62	5	2.92	19	4.52
R+L	45	18.07	5	2.92	50	11.90
計	82	32.93	21	12.28	103	24.52

次ニ外聽道上棘發育強度ナルモノハ總數一〇三例(二四・五二%)ニシテ一般ニ男性ニ著明ニシテ男女兩性共ニ右側ニ多ク、兩側共ニ發育強度ナルモノハ五〇例(一一・九〇%)ナリ。而シテ此ノモノモ男性ニ多キヲ見ル。(第九表參照)

發育中等度ナルモノハ二七一例(六四・五二%)ニシテ、男女性別關係ハ第一〇表ニ示スガ如ク兩側共ニ男性ニ多キモ、左右側別關係

ニ於テハ殆ンド何等ノ差異ヲ認メズ。兩側共ニ中等度ナルモノハ一六〇例(三八・一〇%)ニシテ男性ハ女性ニ比シ稍多

(第一〇表) 外聽道上棘ノ發育中等度ナルモノノ左右並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		合十♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	34	13.65	23	13.45	57	13.57
L	33	13.25	21	12.28	54	12.86
R+L	104	41.77	56	32.75	160	38.10
計	171	64.66	100	58.48	271	64.52

(第一一表) 外聽道上棘ノ發育弱度ナルモノノ左右並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		合十♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	12	4.82	12	7.01	24	5.71
L	18	7.23	26	15.21	44	10.48
R+L	15	6.02	36	21.05	51	12.14
計	45	18.07	74	43.27	119	28.33

キガ如シ。

發育弱度ニシテ唯痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノハ一一九例(二八・三三%)ニシテ第一一表ノ如ク一般ニ左側ニ多ク、而シテ兩側共ニ女性ニ多ク男性ノ約三倍ニ當リ、兩側共ニ發育弱度ナルモノハ五一例(一一・一四%)ニシテ同様女性ニ多キヲ見ル。

外聽道上棘ノ存スル部位反ツテ陷凹セル狀ヲ呈スルモノハ僅カニ

一一例(二・六一%)ニシテ、之レガ男女並ニ左右側別ハ第二二表ニ示スガ如ク兩側共ニ殆ンド同様ニシテ男性ニ比シ女性ニ多ク、兩側共ニ陷凹スルモノハ亦女性ニ於テ稍多キ率ヲ示スヲ見ル。

以上記載セル所ノ各類ニ算入シ得ザル一種ノ異狀型ハ比較的多ク二九例ニシテ、検査頭蓋全數ノ六・九〇%ヲ占メ男性ニ於テ稍多キヲ見ルモ、右左兩側別ノ關係ニ在リテハ特記スベキ差異ヲ認メズ。而シテ兩側共ニ異狀型ヲ呈スルモノハ僅カニ六例(一・四三%)ニシテ男性ニ稍多キガ如シ。(第二三表參照)

以上記述セル余ノ検査成績ト先進諸家ノ歐洲人、樺太アイヌ人、支那人、及ビ東京並ニ畿内地方日本人ノ検査成績トヲ比較シ人種解剖學の見地ヨリ考察セントス。

I、北陸地方頭蓋ニ於ケル外聽道上棘缺如率ハ畿内地方日本人頭蓋ニ於ケル鈴木、宮本等(一一・二%—七%)ノ缺如率

(第一二表) 外聽道上棘ノ存スル部回陷セ  
ルモノノ左右並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		♂	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	1	0.40	4	2.34	5	1.19
L	1	0.40	1	0.58	2	0.48
R+L	2	0.80	2	1.17	4	0.95
計	4	1.61	7	4.09	11	2.61

(第一三表) 予ノ所謂異狀型ノ左右  
並ニ男女的關係

性別 側別	合		♀		♂	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	7	2.81	5	2.92	12	2.86
L	7	2.81	4	2.34	11	2.62
R+L	4	1.61	2	1.17	6	1.43
計	18	7.23	11	6.43	29	6.90

女性ニ多キ結果ヲ得タリ。

即チ日本人頭蓋ニ於ケル外聽道上棘缺如率ハ歐洲人ニ比シ稍尠ク樺太アイヌ人ニ比シ甚ダシク少數ナルモ支那、朝鮮兩人種ニ比シ多キガ如シ。之レ耳科學上乳嘴突起部手術ニ際シ甚ダ重要ニシテ、女性ニシテ而カモ其ノ左側ナルトキハ随分慎重ナル注意ヲ必要トス。森川ハ支那人頭蓋ニ於テ外聽道上棘ノ缺如スルモノノ絶無ナリト稱スルモ余ノ單ニ一個ノ支那人頭蓋(女性)ニ於テ而カモ兩側共ニ缺如セルモノアルヲ見レバ、其ノ缺如率ハ全ク知ルニ由ナキモ、少クトモ支那人ニ於テモ之レガ缺如セルモノ、存スベキハ中野ノ北京並ニ庫倫人(蒙古人)頭蓋検査成績ニ徴シテモ亦明カナルベシ。

Ⅱ、北陸地方頭蓋ニ於ケル外聽道上棘ノ發育強度ナルモノハ一八六%ニシテ岩田(一)ノ東京地方人頭蓋検査成績(一

ト殆ンド一致スルモ、岩田(一)ノ東京地方日本人頭蓋検査成績(一・九%)ニ比シ甚ダ多キヲ見ル。而シテ兩性並ニ兩側別關係ヲ見ルニ鈴木ハ右側ニノミニシテ左側ニ於テノ全然見ザリシニ反シ、余ハ一般ニ左側ニ多キヲ認メ單ニ男性ニ於テノミ右側ニ多キヲ見タルニ過ギズ。然レドモ兩側共ニ缺如スルモノハ鈴木ニ同ジク女性ニ多クシテ一側ノ缺如セルモノモ亦兩側共ニ

七五%)ニ殆ンド一致シ森川ノ支那人頭蓋成績(三八・二六%)ニ比シ甚ダシク尠ク、單ニ二例ニ過ギザルモ朝鮮人頭蓋ニ於テモ發育強度ナルモノ多キガ如シ。即チ日本人頭蓋ニ於ケル外聽道上棘ノ發育強度ナルモノハ支那、朝鮮兩人種ニ比シ甚ダ尠キヲ知ル。

Ⅲ、外聽道上棘ノ發育中等度ナルモノハ外聽道上棘發育狀態ノ各類中最モ多數ニ存在スル事實ハ支那人頭蓋ニ於テモ同様ニ認ムルコトヲ得ト雖モ余ノモノニアリテハ五一・六七%ニシテ支那人種(四六・四九%)ニ比シ稍多ク東京地方日本人(二五・二%)ニ比シ甚ダシク多數ナルヲ見ル。之レヲ要スルニ發育中等度ナルモノハ北陸地方人ニ於テハ東京地方日本人、支那人ニ比シ多キヲ知ル。而シテ之レガ男女性並ニ右左側別ノ關係ハ稍男性ニ多キモ左右ニ於テハ著シキ差異ナキガ如シ。

Ⅳ、東京地方日本人頭蓋ニ於ケル外聽道上棘ノ發育微弱ナルモノ及ビ單ニ痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノハ五五・三%ニシテ被檢顛顚骨總數ノ半數以上ヲ占メ支那人頭蓋ニアリテハ僅カニ一五・二五%ヲ占ムルニ過ギズ。而シテ余ノ北陸地方日本人ニ於テハ二八・三三%ナルヲ見レバ北陸地方人ハ外聽道上棘發育微弱ナルモノ支那人種ニ於ケルヨリモ多キモ、東京地方日本人ニ比シ甚ダシク少ナシ。

Ⅴ、外聽道上棘ノ存スル部位反ツテ凹陷セルモノ及ビ余ノ所謂異狀型ニ就テハ先進諸家ノ記載ニ於テハ何等言及スルコトナキモ余ハ前者ハ二六・一%、後者ハ比較的多ク六・九〇%ニ於テ認メタリ。

小兒頭蓋ニ於ケル外聽道上棘ノ發育狀態、殊ニ其ノ缺如セルモノニ就テ Kesselbachハ歐洲人頭蓋一歲乃至七歲ノモノヲ各年齡別ニ調査シ八年ヨリ一九歲ニ至ル迄ノモノニアリテハ八歲—一〇歲、一一歲—一五歲、一六歲—一九歲ニ區分シ精密ナル觀察ヲ遂ゲ第一四表ニ掲ゲタルガ如キ成績ヲ得タリ。本邦ニ於テ鈴木ハ其ノ詳細ニ就テハ詳カナラザレドモ「全然缺如スルモノ稀少ナリ」ト稱シ岩田(二)ハ四例ノ小兒頭蓋ニ於テ全然缺如スルモノ一例モ見ザリキト云フ。

余ハ十歲以下ノ小兒頭蓋七個(男性二個、女性五個)ニ就キ觀察セルニ右側ニ於テハ強度ナル發育ヲナスモノ、全然

(第一四表) Kieselbach 氏ニヨル小兒外聽道上棘缺如率 (Archiv b. Otologie, 1880 Heft 4)

年齢	調査數	兩側存スルモノ	右側存欠	左側存欠	兩側欠
1j	(26)	69.2	7.7	11.55	11.55
2j	(13)	69.2	7.7	7.7	15.4
3j	(23)	91.3	—	—	8.7
4j	(26)	73.1	3.85	3.85	19.2
5j	(19)	84.2	—	—	15.8
6j	(16)	93.75	—	—	6.25
7j	(15)	100.0	—	—	—
8-10j	(12)	83.3	—	—	16.7
11-15j	(15)	73.3	6.7	—	20.0
16-19j	(9)	100.0	—	—	—

セルヲ以テ次ニ記載シ參考ニ資セントス。

- 1、朝鮮人 (標本番號 二九、〇) (右) 發育中等度 (左) 發育中等度
- 2、朝鮮人 (標本番號 五三七、〇) (右) 發育強度 (左) 發育強度
- 3、支那人 (標本番號 一三九、〇) (右) 缺如 (左) 缺如
- 4、台灣人 (標本番號 二九二、〇 推定) (右) 發育中等度 (左) 發育中等度
- 5、台灣生蕃人 (標本番號 九八、不詳) (右) 發育中等度 (左) 發育強度
- 6、アドミラル島人 (標本番號 五三八、〇) (右) 發育強度 (左) 發育微弱

缺如スルモノ各一例(一四・二九%)ニシテ發育微弱ナルモノ最モ多ク五例(七一・四三%)ナリ。而シテ左側ニ在リテハ發育微弱ナルモノ右側ト同様五例(七一・四三%)ニシテ發育中等度ナルモノ、發育強度ナルモノ各一例(一四・二九%)ナリキ。

之レヲ要スルニ、余ノ材料モトヨリ多シトセザルモ、小兒頭蓋ニ於テハ一般ニ發育微細ナルモノ其ノ最多數ヲ占ムルト雖モ Kieselbachノ研究ニ於ケルガ如ク外聽道上棘ノ缺如セルモノアルヲ認メタリ。

余ハ又同時ニ二三ノ異人種ニ就キテモ觀察

第四節 外聽道上窩(Fossa supratentorium)ニ就テ

外聽道上窩(Fossa supratentorium)ハ外聽道上棘ノ後上方ニ位シ、之レニ接スル小窩ニシテ往々存立並ニ大小不定ナル陷凹ヲナス。Luschka等ニ依レバ胎生期一獨立骨即チ鼓上骨ノ不完全ナル癒着ニヨリ外聽道上棘ト共ニ生ズルモノナラント云フ。

余ハ發生原因ニ就キ論及スルヲ避ケ單ニ該窩ノ發育狀態ニ就テ觀察ヲ行ヒタリ。

外聽道上窩ノ存在スルモノハ七六七例(九一・三二%)ニシテ多數ノ場合ニ於テ之レヲ見、全然缺如スルモノハ僅カニ七三例(八・六九%)ニ過ギズ。

(第一五表) 外聽道上窩發育狀態ノ左右的關係

側別 發育程度	R		L		(R+L)	
	(n)	(%)	(n)	(%)		
強度	171	40.71	180	42.86	351	41.79
中等度	102	24.21	107	25.48	209	24.88
弱度	108	25.71	99	23.57	207	24.64
缺如	39	9.29	34	8.10	73	8.69
總計	420		420		840	

外聽道上窩ノ發育狀態ヲ便宜上發育程度ニヨリ、1、發育強度、2、發育中等度、3、發育弱度、4、全然缺如ニ區別シ各々ノ左右側別並ニ男女性別ニ就テ記載セバ第一五表ノ如ク發育強度ナルモノハ兩側共ニ最も多ク三五一例(四一・七九%)ニ達シ、發育中等度ナルモノ及ビ發育微弱ニシテ僅カニ其ノ痕跡ヲ認メ得ルニ過ギザルモノハ殆ンド同一ノ程度ニ於テ存在シ、前者ハ二〇九例(二四・八八%)、後者ハ二〇七例(二四・六四%)ナリ。然レドモ右左側別ニ就テハ著シキ差異ヲ認ムルコトナシ。之レガ男女性別ニ於ケル相互關係ヲ詳細ニ記載セバ、右側ニアリテハ第一六表ニ示スガ如ク外聽道上窩ノ全然缺如スルモノ發育中等度ナルモノ及ビ發育微弱ナルモノハ女性ニ多ク、獨リ發育強度ナルモノ、ミ男性ニ於テ多キヲ見ル。而シテ左側ニ於テモ亦殆ンド右側ニ等シキ關係ニアリ。

(第一七表參照)

(第一六表) 右側外聽道上窩發育狀態ノ男女的關係

性別 發育程度	♂		♀		♂ + ♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
強度	127	50.60	42	25.45	169	40.63
中等度	59	23.51	41	24.85	100	24.04
弱度	49	19.52	59	35.75	108	25.96
缺如	16	6.37	23	13.94	39	9.38
總計	251		165		416	

(第一七表) 左側外聽道上窩發育狀態ノ男女的關係

性別 發育程度	♂		♀		♂ + ♀	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
強度	131	52.19	46	27.99	177	42.55
中等度	59	23.51	47	28.48	106	25.48
弱度	45	17.53	54	32.73	99	23.80
缺如	16	6.37	18	10.91	34	8.17
總計	251		165		416	

ルモ可ナルベシ。小兒期ニ於ケル外聽道上窩ノ發育狀態ハ一般ニ微弱ニシテ唯其ノ痕跡ヲ認ムルニ過ギザルモノ多ク  
 八例(五七・二四%)ヲ占メ發育中等度ナルモノハ三例(二一・四三%)、強度ナル發育ヲナスモノ一例(七・二四%)、全然  
 缺如スルモノハ二例(一四・二九%)ニシテ外聽道上窩ノ發育狀態ト全ク相並行スルヲ認ム。

第五節

ワルダ、エール氏前及後上乳頭隆起 (Tuberculum supramastoideum  
 anterius et posterius) 並ニブレイシク氏三隆起形成 (Brosike's  
 Dreihöckerbild, Configuratio-trituberculata) ニ就テ

後上乳頭隆起ハ乳頭部ノ後上隅即チ顱頂骨乳頭隅ニ接スル附近ニ於ケル骨質隆起ニシテ特有ナル圓形隆起ヲナシ、

之レヲ要スルニ外聽道上窩ノ發育著明ナルモノハ兩側共ニ最モ多ク、而シテ男性ニ多ク、發育中等度ナルモノハ男性別ニ殆ンド差異ナク稍女性ニ多キヲ見ルノミ。全然缺如スルモノ及ビ發育微弱ナルモノハ女性ニ多キヲ以テ外聽道上窩ノ發育著明ナルモノハ一般ニ男性頭蓋ニシテ、發育微細ナルカ或ハ全然缺如スルモノハ女性頭蓋ナリト思考ス

時ニ顛頂乳頭縫合ヲ超エ小松毬狀ヲナシ側方ニ突出スルモノアリ。

該隆起ハ Schlaginhaufen, Matejka 等ニ依リ記載セラレタルモノニシテ Matejka ハ Crista asteriaca superior 或ハ Processus supramastoidea posterior ト名附ケ、 Guiffrida-Ruggeri (Arti della Società Romana di Anthropologia, Vol. IX, fasc. 3. Roma 1903) ハ Ingressamento retromastoideo. (tra la Cresta sopramastoidea e la Sutura occipito-temporale) ト稱シ、 Brosike ハ五例ノハニア人頭蓋 (Papuschädeln) ニ於テ實見シ Tuberculum supramastoideum ト命名セリ。

Haferland ハ最初メラネシヤ人頭蓋 (Melaneserschädeln) ニ於テ實見シ其ノモノ、發生機轉ニ就キ説明ヲ加ヘ頸筋ノ強キ發育ノ結果、骨質ノ強キ隆起ヲ生ジタルモノナラントセシモ後、伯林及ビドレスデンニ於テ黑猩々頭蓋 (Schimpansenschädeln) ニ於テモ同様ナル形成ヲ爲スモノアルヲ見、又成人頭蓋ニ於テ左右兩側ニ存シ左側ハ一—mm、右側ハ八mm ニシテ表面平滑ナルモノアルヲ認メテ以來氏ハ前説ヲ捨テ、發育初期ニ於ケル新生ニシテ所謂退化機轉ニ依リ出現スルモノナリトノ假説ヲ發表シ Processus asteriacus ナル名稱ヲ與ヘタリ。

然レドモ Waldeyer ハ一九〇九年該部及ビ其ノ附近ニ就キ精密ナル研究ヲ企テ、現今汎ク學界ニ認メラレタル後上乳頭隆起 (Tuberculum supramastoideum posterius) ナル名稱ヲ附シタリ。

前上乳頭隆起ハ乳様上櫛 (Spina supramastoideum) ノ後端、鱗狀縫合 (Sutura squamosa) ニ接スル部位ニ於テ著シキ骨隆起ヲナスモノニシテ時ニ顛頂骨部ニ接續セルコトアルヲ見ル。

Haferland ハ該隆起ニ對シ Crista supramastoidea ナル名稱ヲ附シ記載セルモ、W. Waldeyer ハ後上乳頭隆起ニ對比シ、前上乳頭隆起 (Tuberculum supramastoideum anterius) ナル名稱ヲ與ヘタリ。

後乳頭隆起ハ上橫副脚 (oberen queren Nebenschenkel) ノ及ビ上半月狀線 (Lineae semicirculäre superior) ノ相合スル部位ニ於テ生ズル一種ノ異狀骨隆起ニシテ I. Lanzi ハ一九〇七年 Apofisi retromastoide. (Processo retromastoideo) ナル名稱ヲ與ヘタリ。此レヨリ先一九〇三年 W. Waldeyer ハ Processus retromastoideus ト命名シ一九〇九年人種解剖學並

ニ人類學上興味アルモノニシテバブア(Papua)族ニ多ク、<sup>1</sup>二二四個ノ頭蓋ニ於テ一八六例(發育弱度一四八例)、<sup>2</sup>發育中等度三五例、發育強度三例)ヲ見タリト云フ。堀ハ我解剖學教室ニ於テ北陸地方頭蓋四一〇個中〇・三%ニ於テ認メタリ。

余ハ北陸地方頭蓋四二二個ヲ觀察シ前上乳頭隆起ノ存スルモノ九六例(一一・三七%)ニシテ第一八表ニ示スガ如ク發

(第一八表) Proc. supramastoideum anterior  
ノ頻度ノ左右的關係

側別 發育程度	R		L		R × L	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
強 度	8	1.90	6	1.42	14	1.66
中 等 度	11	2.61	10	2.40	21	2.51
弱 度	30	7.11	31	7.35	61	7.23
計	49	11.61	47	11.14	96	11.39

(第一九表) Proc. supramastoideum anterior  
ノ右左、男女的關係

側別	發 育 程 度	合		♀		♂ + ♀	
		(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	強 度	6	2.39	2	1.17	8	1.90
	中 等	6	2.39	5	2.92	11	2.61
	弱 度	15	5.98	15	8.77	30	7.11
	計	27	10.76	22	12.86	49	11.61
L	強 度	5	1.92	1	0.59	6	1.42
	中 等 度	6	2.39	4	2.34	10	2.37
	弱 度	14	5.58	17	9.94	31	7.35
	計	25	9.89	22	12.87	47	11.14

育弱度ナルモノ最モ多ク六一例(七・二三%)、發育中等度ナルモノハ二一例(二・五一%)、發育強度ナルモノハ一四例(一・六六%)ニ過ギザルヲ認メタリ。而シテ之レガ左右側別關係ハ僅カニ右側ニ多キガ如キモ特記スベキ差異ヲ見ズ。

男女性別ニ就テハ第一九表ニ示スガ如ク兩側共ニ一般ニ女性ニ多キヲ見ルモ、發育中等度ナルモノハ兩側共ニ殆ンド差

異ナク發育強度ナルモノハ男性ニ多キニ反シ發育弱度ナルモノハ女性ニ多ク存ス。而シテ兩側共ニ前上乳頭隆起ノ存スルモノハ二七例(六・四%)ニシテ中、男性一三例(五・一%)、女性一四例(八・二%)ニシテ第二〇表ノ如ク一般ニ女性ニ多ク唯發育強度ナルモノ、ミ男性ニ稍多シ。其ノ他一側發育弱度ニシテ他側發育中等度ナルモノ男女各一例、一

(第二〇表) 兩側共ニ Proc. supramastoideum anterius 存スルモノノ男女的關係

性別 發育程度	合		男		女	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
強度	2	0.80	1	0.58	3	0.71
中等度	3	1.20	1	2.34	7	1.66
弱度	8	3.19	9	5.26	17	4.03
計	13	5.19	14	8.18	27	6.40

(第二一表) Proc. supramastoideum anterius ノ頻度ノ左右的關係

側別 發育程度	R		L		R + L	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
強度	8	1.90	9	2.13	17	2.02
中等度	10	2.37	7	1.66	17	2.02
弱度	18	4.27	23	5.45	41	4.86
計	36	8.54	39	9.24	75	8.89

側發育強度ニシテ他側發育中等度ナルモノ男性ニ一例ニシテ前記兩側ニ存スルモノト合算スレバ男性一五例(五九・八%)、女性一五例(八七・七%)即チ總計三〇例(七・一%)ナリ。

後上乳頭隆起ノ存スルモノハ七五例(八・八九%)ニシテ前上乳頭隆起ニ比シ稍尠キモ、其ノ發育狀態ハ殆ンド同様ニシテ發育弱度ナルモノ最モ多ク四一例(四・八六%)、中等度ナルモノ及ビ發育強度ナル

モノハ一七例(二・〇二%)ナリ。而シテ之レガ左右側別關係ニ就テハ第二一表ニ於ケルガ如ク記載スベキ差異ヲ認メザルモノ一般ニ發育強度ナルモノ及ビ發育弱度ナルモノハ左側ニ稍多ク、獨リ發育中等度ナルモノ、ミ右側ニ多キヲ見、男女性別關係ハ第二二表ニ明瞭ナルガ如ク兩側共ニ男性ニ多ク女性ニ數倍スルヲ見ル。

兩側共ニ發育強度ナルモノ三例(〇・七二%)、發育中等度ナルモノ三例(〇・七二%)、發育弱度ナルモノ八例(一・九%)

(第二二表) Proc. supramastoideum posterius  
ノ左右男女的關係

側別	發程 育度	合		♀		合 + ♀	
		(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
R	強 度	7	2.79	1	0.59	8	1.90
	中等度	8	3.19	2	1.17	10	2.37
	弱 度	17	6.77	1	0.59	18	4.27
	計	32	12.75	4	2.34	36	8.54
L	強 度	8	3.18	1	0.59	9	2.13
	中等度	7	2.79	—	—	7	1.66
	弱 度	20	7.97	3	1.75	23	5.45
	計	35	13.94	4	2.34	39	9.24

即チ總計一四例(三三二一%)ニシテ全數男性ニ屬シ女性ニ於テハ一例モ之レヲ見ズ。

即チ後上乳頭隆起ハ一般ニ左側ニ多ク而シテ男性ニ多ク各型共ニ女性ニ數倍スルヲ見ル。

之レヲ要スルニ前上乳頭隆起及ビ後上乳頭隆起間ノ關係ハ少クトモ余ノ觀察セル範圍ニ於テハ前者ハ後者ニ比シ存在スルコト多シト雖モ左右側別ノ差異ハ殆ンド認め得ズ。而シテ男女性別差異ハ前者ハ女性ニ多キニ反シ後者ハ男性ニ於テ之レヲ見ルコト多キハ此等發生起原ニ關シ注目スベキ價値アルモノナランカ。

ノ同一側ニ存スルモノアルヲ見 Dreihöckerbild (Configuratio trituberculata) ナル名稱ヲ附セリ。

Waldeyer ハ一九〇九年 Luschan ノ私集ニカ、ル頭蓋中一例ヲ見タリト報告セリ。余モ亦検査頭蓋四二二個中一例(番號二二三二、合)ニ於テ左側ニ存スルヲ見タリ。此ノ者ハ蓋シ比較的稀有ニ屬スルモノナルベシ。

總 括

以上記述セル邦人特ニ北陸地方頭蓋ニ於ケル顛顚骨鱗狀部調査成績ヲ總括セバ次ノ如シ。

I、顛顚骨顛頂突起ノ頻度ハ邦人ニ於ケル余ノ調査ニ依レバ一七五九%ニシテ諸家ノ成績ヲ總合スルニ三二・八

三%、(五二九%—二八%—一七五九%)歐洲人種ニアリテハ二八三五%、(五〇%—六七%)樺太アイヌ人種ニアリテハ一九四%ニシテ樺太アイヌ人種ニ比シ稍多キヲ見ルモ歐洲人種ニ比スルニ殆ンド人種の差異ヲ見ズ。而シテ兩側間ニ於ケル關係ハ左側ニ存スルモノ多ク、男女性間ニ於テハ一般ニ先進諸學者ノ成績ト相一致ス。該突起ト *Sulcus pro arteria meninge media* トノ關係ハ之レニ關スルモノ一六八%ニシテ足立ノ畿内地方邦人頭蓋成績(四二九%)ニ比シ尠キガ如キモ其ノ左側ニ多ク而シテ男性ニ多キハ同様ナルヲ見ル。

中顛顛動脈溝 (*Sulcus arteria temporalis media*) トノ關係ハ該突起ニ關係ヲ有セザルモノ多ク、之レニ關スルモノ三二・八一%ニ過ギズト雖モ血管溝ト該突起トハ何等カノ關係存スルモノ、如シ。

I、中顛顛動脈溝 (*Sulcus arteria temporalis media*) ハ外聽道上緣部ニ於ケル垂直線ニ對シ後上方ニ走行スルモノ最も多ク六五・六四%ヲ占メ前上方ニ走行スルモノハ五・七九%ニ過ギズ。

該血管溝ノ分岐状態ハ余ノ調査ニ於テハ四枝以上ノモノヲ見ズト雖モ、男性ニアリテハ一般ニ著明ニシテ余ノ所謂 II、III、IV、各型ニ屬スルモノハ女性ニ於テハ見ルコト能ハザリキ。之レ男女兩性頭蓋識別上重要ナル目標ナリト信ズ。

III、外聽道上棘ノ全然缺如セルモノハ六・九四%ニシテ邦人頭蓋ニ於ケル諸家ノ成績(六・九七%)ニ殆ンド相一致シ歐洲人種(二三・六七%)、樺太アイヌ人種(二八・六%)ニ比シ尠ク、支那人、朝鮮人ニ比シ稍多キガ如シ。而シテ其ノ左側ニシテ女性ニ多キハ耳科學上緊要ナルコトナリトス。

該棘ノ發育状態ハ東京地方邦人ニ比シ發育中等度ナルモノ多シト雖モ、支那及ビ朝鮮兩人種ニ比シ一般ニ微弱ナルモノ多キハ先進諸家ノ說ニ一致セルヲ認メタリ。

III、外聽道上窩 (*Fossa suprameatum*) ノ發育状態ハ殆ンド外聽道上棘發育状態ニ一致シ、男性ニ著明ニシテ女性ニ於テハ一般ニ微弱ナリ。

V、余ハ前上乳頭隆起 (Tuberculum supramastoideum anterius, Waldeyer.) ノ存スルモノ一三二七%、後上乳頭隆起 (Tuberculum supramastoideum posterius, Waldeyer.) ノ存スルモノ八八九%ニ於テ認メ、Brösikeノ所謂三隆起形成 (Dreihöckerbild, Configuratio trituberculata.) ハ唯一例(番號二二三、上、L)ニ於テ存スルヲ見タリ。而シテ之等隆起ノ左右側別關係ニアリテハ特記スベキ差異ナキモ、男女性別關係ニ於テ、前上乳頭隆起ハ女性ニ多ク、後上乳頭隆起ハ男性ニ多キ結果ヲ得タリ。之レ異常隆起發生ニ對シ何等カノ價值アルモノナランカ。

稿ヲ終ルニ臨ミ終始懇篤ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ賜ハリタル岡本教授ニ對シ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

### L i t e r a t u r

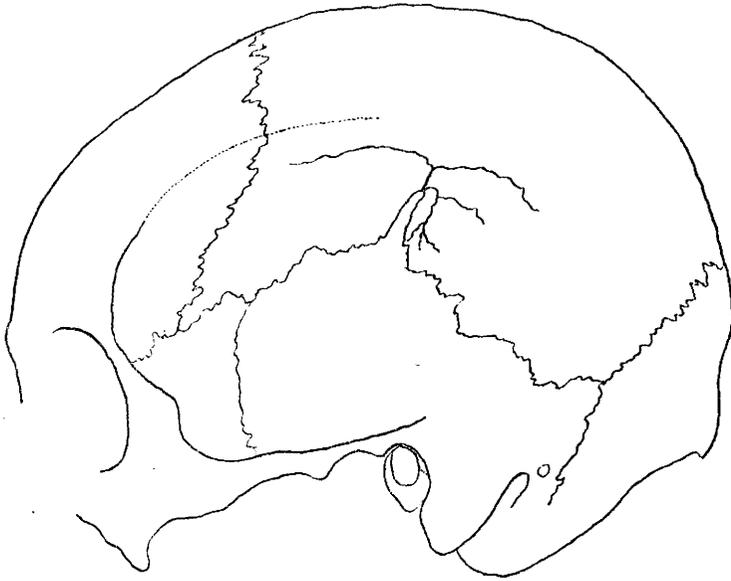
- 1) **Abachi** : Processus parietalis squamæ temporalis, Zeitschrift f. Morphologie u. Anthropologie, Bd. 10, Heft 3, 1907.      2) **Anntschien** : Ueber einige Anomalien der am menschlichen Schädel mit 1es. Petriksichtung des Vorkermeres der Archanalien bei verschiedenen Rassen, Jahresbericht über die Fortschritte der Anat. u. Physiologie, Bd. 10, Abt. 1.      3) **Aeby** : Beiträge zur Kenntnis der Mikrocephale, 2, Arch. f. Anthr. 5, 1865. (Zit. von P. Bartels)      4) **Albrecht** : Ueber die grössere Pestilität des weiblichen menschengeschlechts in anatomischen Hinsicht, Corr. Bl. d. deutschen Anthr. Gesellschaft in München, 1875. (Zit. von P. Bartels)      5) **Ackermann** : Ueber die körperliche Verschiedenheit des Mannes vom Weibe afässer den Geschlechtheiten, Aus dem Lateinischen übersetzt u. mit Anmerkungen versehen von Joseph Wenzel (Zit. von P. Bartels)      6) **Bartels, M.** : Mitteilung über Geschlechtsunterschiede am Schläfenbein, Corr. Bl. d. deutschen Gesellschaft f. Anthr. 33, Nr. 8, 1892.      7) **Brösike, G.** : Die Anthropologischen Sammlungen Deutschlands, Arch. f. Anthropologie, 1881. (Zit. von W. Waldeyer.)      8) **Ecker** : Ueber eine charakteristische Eigentümlichkeit in der Form des weiblichen Schädels, Arch. f. Anthr. 2, 1865.      9) **Davis, J. Barnard** : Ueber makrocephale Schädel u. über die weiblichen Schädelform, Arch. f. Anthr. 2, 1866.      10) **Gaetano-Cutore** : Ancora di uno speciale canal perforante asterioso nella squama temporale dell'uomo, Ann. Anzeiger, Bd. 29, 1906.      11) **Giuffrida-Ruggieri** : Crani e Mandibole di Sumatra, Atti della Societa Romana di Antropologia, Vol. 9, fasc. 3, Roma 1903. (Zit. von W. Waldeyer.)      12) **Haberland** : Einen Schädel mit einem Proc. asteriacus, Arch. f. Ethnologie, Ed. 37, 1905.      13) **廣瀬、和田、赤松** : 新撰耳鼻咽喉科學、前編、増訂六版。      14) **堀泰二** : 後頭骨ニ於ケル異常ニ就テ、十全會雜誌、第29卷。      15) **平井** : 樺太アイヌ人骨ノ研究、人類學雜誌、

- 第42卷附録。 15) 平井：静岡縣濱名郡入野村字蛭塚ヨリ發掘セラレタル三頭蓋骨ニ就テ、人類學雜誌、第43卷、第5號。 17) Hyrtel：Lehrbuch der Topographischen Anatomie u. ihrer Praktisch medizinisch-chirurgischen Anwendungen. Bd. 1 1882. 18) 岩田一：危險性顛顚骨ニ就テ、大日本耳鼻咽喉科會報、第一九卷、第一號。 19) 岩田、吉井：近世耳鼻咽喉科學、增訂九版。 20) Jansen, A.-Kobrak, F.：Praktische Ohrenheilkunde für Aerzte. Bd. 4, 1918. 21) Kanasugi, E.：Topographische-chirurgischen Anatomie der Pars Mastoidea. 1908. 22) 清野、金關、平井：日本石器時代ノ變形頭蓋ニ就テ、人類學雜誌、第43卷、第3號。 23) 清野、金關、平井：福岡縣筑紫郡山家村甕棺ヨリ發見セラレタル金石併用時代人骨ニ就テ、人類學雜誌、第43卷、第4號。 24) 菊地：本邦人顛顚骨ノ耳科外科の解剖、大日本耳鼻咽喉科會報、第13卷、第4.5號。 25) 清野、宮本：津雲貝塚人人骨ノ人類學的研究、第二、頭骨ノ研究、人類學雜誌、第41卷、第3號。 26) Lanzi L.：Le anomalie della pars mastoidea del temporale umano. Con la descrizione di un nuovo gruppe di anomalie e considerazioni sulla pars mastoidea normale, Atti della R. Accademia del Fisiocritici in Siena, Serie 5, Vol. 19, anno accademico 216. 1907. (Zit. von W. Waldeyer.) 27) v. Langer-Toldt：Lehrbuch der Systematischen u. Topographischen Anatomie, Aufl. 6 1897. 28) Luschan, V. Über ein Os supratympanicum beim Menschen. Zeitschr. Ethnol., Jahrg. 37 H. 4. 1905. 29) Martin, Rudolf.：Vierteljahresschrift der naturforsch. Gesellschaft, Zürich. 1896. (Zit. von P. Bartels.) 30) 宮本：東部亞細亞ニ於ケル諸人種ノ人類學的研究、第二現代日本人骨ノ人類學的研究、第一部、頭蓋骨ノ研究、東京人類學雜誌、第39卷、第10, 11, 12號。 31) Matiejka：Ueber die an Kammbildungen erinnernden Merkmale des menschlichen Schädels, Sitzungsber. d. K. Akad. d. Wiss. in Wien. Mathem.-naturw (Zit. von W. Waldeyer.) 32) 森川：顛顚骨ノ外科的解剖學補遺、京都耳鼻咽喉科臨床、第19卷、第2號。 33) 中野：北京及庫倫ニテ得タル頭蓋骨ノ統計、十全會雜誌、第25卷、第11號。 34) 中野：異狀頭蓋ノ1例、十全會雜誌、第49卷、第52號。 35) Rauber-Kopfsch,：Lehrbuch u. Atlas der Anatomie des Menschen, Abt. 2 Aufl. 12 1923. 36) Schültze：Ueber die möglichkeit einige für operative Eröffnung des Warzenfortsatzes, topographische anatomisch wichtige Verhältnisse am Schädel von der Operation zu erkennen u. über den praktische Werth einer solchen Erkenntniss. Arch. für Otologie. Bd. 24. 37) Schültze, O.：Atlas u. kurzgefasstes Lehrbuch der topographischen u. angewandten Anatomie, Aufl. 3 1922. 38) Schwalbe：Zeitschrift für Morphologie u. Anthr. Bd. 6, 1903. 39) 鈴木：人體系統解剖學、第1卷(大正七年)。 40) Sömmering：Bau des Menschlichen Körpers, 1791-1796. 41) Virchow, R.：Ueber das Os Temporale, Jahresbericht über die Fortschritte der Anat. u. Physiologie. Bd. 4. 42) Waldeyer, W.：Der Processus retromastoideus, Abhandlungen Königl. Preuss. Akademie der Wissenschaften, 1909. 43) Zoya：Ann. Univers Cl. 38. 1864 (Zit. von E. Kanasugi.)

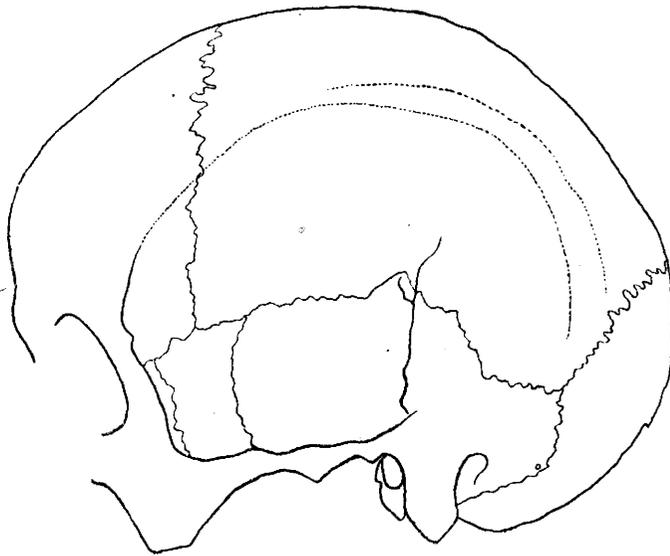
附圖說明

- 圖ハ總テ最初マルチン氏「チオプトグラフ」ヲ以テ描寫シ而シテ之レヲ再ビ「パンタグラフ」ニ依リ縮少描寫セルモノナリ。(四分ノ一縮圖)
- 第一圖、顛顚骨顛頂突起ニ接シ Sulcus pro arteria meningea media ノ存スルモノヲ示ス。(標本番號二三〇號、男性六三歲、左側)。
- 第二圖、顛顚骨顛頂突起ニ接シ Sulcus arteria temporalis media ノ存スルモノヲ示ス。(第一型)、(標本番號二三一號、男性二五歲、左側)。
- 第三圖、顛顚骨顛頂突起ニ關セズ Sulcus arteria temporalis media ノ存スルモノヲ示ス。(第二型)、(標本番號、四三三號、男性四九歲、左側)。
- 第四圖、顛顚骨顛頂突起存スルモ全ク血管溝ヲ缺知セルモノヲ示ス。(第三型)、(標本番號一九八號、男性六二歲、右側)。

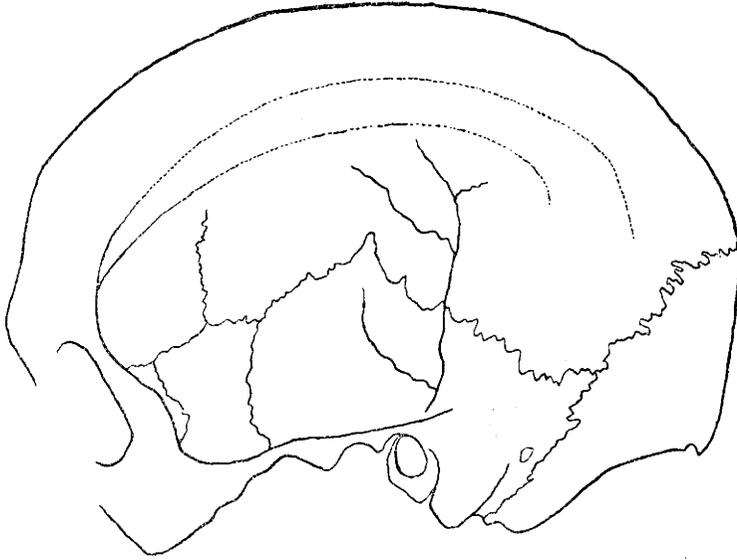
第一圖



第二圖



第三圖



第四圖

